

【はじめに】

徳島県のウメは約200ha栽培されているが、近年果実の消費量は減少の一途をたどっており、栽培面積は減少傾向にある。新品種「露茜」は、これまでの品種にはない、赤色色素「アントシアニン」やポリフェノール類等の機能性成分を豊富に含んでおり、赤い梅酒や梅ジュース等の新しい加工品開発や需要拡大が期待できる（図1）。しかし樹勢が弱く、既存品種と同様の枝梢管理を行うと、樹冠拡大が遅延しやすい。

新植や改植時に早期成園化を図る上で、当該品種に合った樹形や整枝法、特に苗木植え付け時から幼木期の間における、枝梢管理技術について検討したので紹介する。



図1 露茜の果実

【試験方法】

試験は、当センター上板試験地において実施した。2013年試験は、露茜1年生苗木の植え付け時における主幹形及び開心自然形の整枝法の違いと切り返し程度の検討、2014年試験は、より詳細な切り返し基準の検討を行い、2年生樹の生育量を比較した（図2）。切り返し長は、主幹として残す、苗木の接ぎ木部から先端部までの長さとした。

【試験結果】

2013年試験の結果、1年生枝の総伸長量は主幹形100cm区が最も大きく、次いで主幹形60cm区、ウメで一般的に用いられる開心自然形60cm区は最も小さかった（表1）。

植え付け後の整枝法は、既存品種では3本主枝開心自然形が用いられるが、露茜には主幹形が適して

いると推察された。

2014年試験の結果、主幹形整枝における1年生枝の総伸長量は、100cm切り返し区が最も大きく、次いで80cm切り返し区および60cm切り返し区、120cm切り返し区の順となった。平均長は、120cmで切り返すと短くなり、他の処理に大差はみられなかった。樹高は、切り返す長さに応じて、高くなる傾向であった（表2）。

以上から、露茜1年生苗木を定植する場合、接木部から100cm位置で切り返し後、主幹形に整枝すれば2年生樹は最も良好に生育するものと思われた。



図2 主幹形2年生樹の生育量比較

表1 整枝法と切り返し程度の違いが2年生樹の生育に及ぼす影響(2013年)

試験区	1年生枝		新梢		副梢		幹周
	総伸長量 (cm)	伸長量 (cm)	本数 (本)	平均長 (cm)	伸長量 (cm)	本数 (本)	平均長 (cm)
主幹形 100cm	3,514	3,137	32	99	377	21	18
主幹形 60cm	2,975	2,543	19	132	432	19	22
開心自然形 60cm	1,152	937	17	59	216	13	15

表2 切り返し程度の違いが主幹形2年生樹の生育に及ぼす影響(2014年)

試験区	1年生枝			幹周	樹高
	切り返し長 (cm)	総伸長量 (cm)	平均長 (cm)		
120cm	1,887	28	67	8.2	235
100cm	3,019	33	93	9.5	220
80cm	2,383	26	93	8.6	211
60cm	2,317	24	98	8.7	193

【おわりに】

既存品種から露茜への改植時、早期成園化に最適な苗木植え付け方法と整枝法が明らかになった。

鮮やかな赤色を生かした、着色料を使わない加工品づくりが県内産地で始まっており、本品種の果実特性を活かした加工法と併せて、より一層県下に広く導入されるよう普及に努めていきたい。

（農産園芸研究課 果樹担当 福田 雅仁）